

蝸牛角上爭何事
石火光中
寄此身

白樂天



伊作
印

白樂天

東洋の詩とこころ

片山 哲著

著者略歴

明治二〇年七月、和歌山県に生る。
 明治四五年、東京大学法科卒業、弁護士となり、
 労働争議・小作争議等の弁護に当る。
 大正一五年一二月、社会民衆党書記長。
 昭和五年二月、神奈川県より衆議院議員当選。
 昭和二〇年一月、日本社会党書記長、翌年同委員長となる。
 昭和二二年五月、内閣を組織。
 現在、衆議院議員
 著書「人事調停法概説」「女性の法律」「民主主義の回顧と展望」「安部磯雄伝」「大衆詩人・白楽天」等
 訳書「シート・バイブル」上・下
 現住所 神奈川県藤沢市片瀬二一二六

1960 ©

白 楽 天

現代教養文庫 277



昭和三十五年五月三十一日 初版第一刷発行
 昭和二十六年三月二十日 初版第二刷発行

定価一三〇円

著者 片山哲

発行者 土屋実

印刷者 堀鉄判

東京都千代田区飯田町一ノ二八

東京都千代田区神田駿河台三ノ七（駿台ビル）

発行所 社会思想研究会出版部

電話 (291) 二九三 (201) 九六六・振替東京七一八一二

落丁・乱丁は直接小社にお送り下さればお取替いたします

担当・杉田 茂

現代教養文庫

277

白　　楽　　天

東洋の詩とところろ

片　山　　哲　著

社会思想研究会出版部刊

白氏長慶集大凡人之文各有所長樂天之長可以爲多矣
夫以諷諭之詩長於激開通之詩長於遣感傷之詩長於切
五字律詩百言而上長於贈五字七字百言而下長於情賦
贊戒之類長於當碑記敘事制詔長於實啓奏表狀于
於直書檄詞策剖判長於盡惣而言之不亦多乎哉至
於樂天之官族景行與子之交分淺深非敘文之要也故不
書長慶四年冬十二月十日微之序

白氏長慶集

第一帙

第一

諷諭一

古調詩第二

諷諭二

古調詩

第三

諷諭三

新樂府第四

諷諭四

新樂府

第一

閑適一

古調詩第六

閑適二

古調詩

第一

閑適三

古調詩

まえがき

まえがき

中国における大きな変化の一つは、長期計画の文字改革である。漢字の大巾制限を行ない、略字とローマ字併用にふみきっているのである。そのためにすでに横書を断行したことなど、これらは、けだし大きな変革だといわなければならぬ。わが日本に与える影響もすこぶる大きいわけだ。まったく日本も安閑としては居られなくなった。がんらい、日本は中国と同文同書、ともにたて書を長い間、実行してきたのであるが、漢字の本家本元、中国が、お先に横書きを断行し、漢字大制限という画期的文字改革にふみきった以上は、わが日本もシットして居られなくなった。ひとつふみ切つて、横書きぐらいに進まざるを得なくなってきている。

それは別に、中国に追従とか、やたらに礼讃するとか、さような心持でいうわけではなく、変化のすこぶる激しい世界の渦巻きの中にあつて、日本をして何時までも、ただひとりタテ書漢字カーテンのなかに閉ち込めたまま、時代ばなれさせることができない時勢になってきたことを語るわけだ。そこでわれわれ国会議員も、超党派でこの

文字問題を研究することとなった。ただに研究だけでなく進んで「日本字と日本語」について何らかの対象をとる為に、学者、実業家、一般文化人らとともに「言語政策を話しあう会」を作って、これから両院に一つの文字改革に関する決議案を提出しようとする段どりにまで進んでいる。過般、政府が、郵政省のかわりに、通信省を復活しようとした時、この通の字は余りにも古すぎる、当用漢字からも削ろうとしている際であるから、役所の名前に、そんな旧式な漢字を使用してはいけなと、「言語政策を話し合う会員」一同立ち上って、遂にこれを廃案にまで追い込むことができた程であった。だんだんと国会速記録や、官報などの横書きを実行するようにしたいと思ひ、目下その準備に活躍中である。

そこで、時代から遠ざけられる運命にある難解の漢字漢文を、今後どうとりあつかうかという問題にぶつかるのである。特別の意味を、たった一つの字で現わすことのできるように、うまくこしらえ上げた表意文字の漢字、または複雑な心理描写を短い文章で現わす巧妙さ、例えば、五言絶句、七言絶句などになると、大にしては天地創造の神々の物語りから、人情こまやかな伝説に到るまで、この文字を上にしたたり、下にする使いこなし方は、まったく神技としか思えないほどである。よくもたった一つの字で数千万言にも優る表現をなし得るといふ、このうまさは、ただ驚嘆するばかり

である。したがって文字の解釈にはなかなか骨がおれる、余程勉強をしないと、その作った文字の意味、したがってそれから来る文章を理解することができなくなる。よほど研究をしないとわからない意味深長な漢字と漢文、漢詩などであるが、これらを、これからいったいどう扱っていいのであろうか。考えざるを得ない大問題となる。

私はこの問題を解決する一策として次のような案がいいと思う。すなわち、漢字を知り漢文を読むことは心神の修養と鍛練に必要なことであるから、その意味で之を扱うこととする。漢詩をひもどいたり、有名な古典本に親しむことは、高雅な趣味の涵養になるので、その意味で愉しんで之を読むことにしたい。なかなか、妙味つきざるものがある、名文章になると調子がいいので、二三回よんでいるうちにすぐ誦ずることが出来るようになるのも不思議なほどである。

しかし、漠然と漢詩といったところで、それには数えきれぬほど沢山な名詩名文がある故、その中から代表的なものを選び出すことも、すこぶる困難である。そうなる、これらの中で、読みやすい、わかりやすいのが一番いいと思う。よって私は日本人に深いなじみのある白楽天の白詩文集（はくしもんじゅう）を選び、素人ながらヘタの横ずきで読んでいるうちに、驚いた。面白い、愉快きわまるし、共鳴し、同じよ

うに憤慨する個所もあって、独りだけヒザを打って喜んだり三嘆したりするのは、惜しいことと思ひ、日本ではあまり知られていない白詩を集めて、これを一般に推薦しようと思ふに至った。以下そのわけを申し述べる。

白樂天の詩は、盛唐時代の代表的な名詩の一つである、そればかりではなく、型のかわった大衆的な作詩方法をとり、またその内容も頗る面白い、こういう詩なればこそ、漢字漢詩のもつ特種な味を知ることが出来ると考へる。さらに、この白詩に大變興味を覚えるようになったのは次の点であるが、これは実にすばらしいことと感服している。即ち白詩には、中国に於ける平和の思想や、反戰的な大衆の訴へが、どんな形で歌われているかがよくわかる。下積みになつて一生涯を終る貧乏人や、生涯を苦しみ通しの氣の毒な婦人に同情しこれらの人々を慰める詩、時の権力者に抵抗し、不正義を糾弾するの詩などが沢山でてくる。とくに私の心を大きくひきつける点は、これがおれがと出世主義のこの世の中、その生存競争激甚のさなかに、彼、白樂天は、ちよう然として、悟りの境地に入るべく楽しき多くの夢を歌いつづけていることだ。面白い限りだ。私はこれら白翁が無我の境にはいろうと歌うものを書き集めているうちに、いつの間にやら、別世界にはいり込んだ輕快な氣持になつてしまつた。そこで私は、こういうことに趣味をもつ同好の士に、是非とも白詩を読んでもらいたいと思ふ。

い、これらをここに書きつづることとした。

もちろん之を綴るにつき、そもその出発点自体が、自分の修養と趣味からでできているわけだから、如何にも素人らしい自己流の解釈で、説明をしているにすぎない。しかし、よめばよむほどに、その名調子に魅せられてくる。彼白樂天はまことに天分にめぐまれたる天才詩人であり、いい廻しのすこぶる上手な、平明かつ流麗な名文家であり、七十五歳の長き生涯を、自然と人生、花と柳を愛しつつ自然の大きな摂理を信じ、楽しく朗かに歌いつづけてきた樂天家である。しかしてその詩の内容も、すばらしいほど、近代感覚にみたまされている。こういう面白い詩を、誰も読みもしなければ、かえりみもしないで、世間から忘れられてしまうことは、あまりにも惜しい限りと思っている。

キリスト教神学を研究するために欧米に留学したある学生に、神学校の先輩は次のようにいった。「君たち、バイブルを読む前に、まずシエキスピアとゲーテと、ユーゴーを読め」と、こうすすめたそうだ。これはなかなか面白いことだ。論語、孟子をきく前に、唐詩、白詩をよみなさいといたっているのである。聖書をよむ前に東洋人は白詩をよんだならば、聖書もよくわかるであろう。もちろんこれは人工衛星や、地球物理学の研究に専念せんとする科学青年にすすめようとするものではない。

以下、白樂天の名詩、名文、名調子をここに例示して、上記の特色を示すこととしよう。

風景をあん記しているという白樂天の詩

憶江南詞　おくこおなんし　こおなんを、おもうの歌

(筆者の意訳)

江南好

風景舊曾諳

日出江花紅勝火

春來江水綠如藍

能不憶江南

ああ江南は、よきところなり、われ江南を好む

風景もとより、おさなき頃より、そらんず

日、出づれば、江花くれないにして、火にまさり

春、来りなば、江水みどりにして、あいの如し

よく江南を、おもわざらんや、江南を忘れんとしても忘る

る能わず

江南は揚子江の南である、紅花は揚子江の南一面に咲いている紅の花、江水は揚子江の大きな流れ、ああ思い出してもなつかしい江南、すっかりこの風景をそらんじて

いる。

自然の摂理を感じるの歌

府西池

ふせいの池

(筆者の意識)

柳無氣力枝先動

柳、氣力なく枝まず動く

池有波紋冰盡解

池に、はもんあって、氷ことごとくとけんとする。

不知今日誰計會

知らず、今日たれが、之をけいかいするや自然の大きな摂理驚くにたえたり

春風春水一時來

(考えているうちに)春風春水一時に來たる

冬の間だらりとたれていた柳の木、その枝が、ちらちらと動きだした。何んのためにちらちら動きだしたのであろう、と知っているうちに、また池のおもに、はりわたしていた氷が、ことごとくとけ出した。ああ春がおとずれてきたのであろう。いったいだれが、春の訪れなどを引張り出すのであろう。この大きな自然の設計はいい、たれが技師でやり出したのであろう、まことに不思議でたまらない。自然の摂理は不

可解だ、ふしぎで致し方がないと考えこんでいる間に、春風春水一時に来たる。

春風 しゅん風

一枝先發苑中梅

一し、まず、ひらくえん中の梅（暖かい庭
さきの梅）

櫻杏桃梨次第開

おうきよう、とうり、次第にひらく

薺花榆莢深村裏

せいか（なすな
の花）、ゆきよう（にれの
さや）、しんそんのうち

亦道春風爲我來

また、いう春風、わが為に来たる

暖かい南側の庭前えんさきの梅の木が、まず春のおとずれに応じて、すべてのさきがけとし

て、花を咲かせる。つづいて桜杏桃梨が花をさかせる、春のさそいに応じてである。

春風というものは、なぜこんなに美しい花を咲かせる力をもっているものだろうか、

自然の力は不思議でたまらない。野山、たんぼ路のなすなの花も、にれのさやまで、

春風を受けて、次のようにいい出してくる、われわれ名もないものにまで春風は暖か

い春風を送ってくれ、花を咲かせてくれたり、さやがふくらんでくるようにしてくれ

る。ふみにじられる弱者たるわれら、路傍の草花にまで、暖味を送ってくれる、ああ

有難いことだ、亦いう春風わが為に来ると、かく喜ぶのである。もちろんあわれな人

間にも、春風はまんべんなく暖かき風をふかせる。自然の妙なる摂理よ、感慨まことに無量だと歌う。

そこで私は、白詩を次の順序で説明しようと思う。即ち四段階にわけろ。

一、時代を諷刺した詩を第一にもってくる。もっとも代表的なものは秦中吟（しんちゅうぎん）と新樂府（しんがふ）であるが、いちいちこれを解説することをやめる、すなわち特に有名なものはすでに紹介されずみであるし、わけても、新樂府五十首の訳註は最近とくに多く出版されている。私のねらいは、その文学的判断をするのではなく、作者が悲憤慷慨して、鋭くその時代を批判した我が国では未だ余り知られていないものを集めようとするのである。

二、第二番目にとりあげているのは、自然の摂理を感じ、従って自然と人生、花と柳、山と川、大自然の親しさに、人に話しかけるように、物語りをはじめている親睦感に、すこぶるひきつけられたので、それらの愛情の詩をかきつづることとした。

三、第三番目には、悟りの境地、無我の境にはいつている詩、またその境地を求めようと努力している詩を集めてみた。これらの詩には、漢文学上、どういう価値をもつものなるか、それは私には関係のないこととして、政治にたずさわるものの一人として、またよき社会に住みたいと念ずる一個の社会人として、これらの詩にすこぶる

興味を感ずるので、これらをも収録することとした。面白いのがすこぶる多いので、その一つだけを示し、こんな調子であることを知ってもらふよすがにする。

詠懷

かい（かんかい）をえいず

我知世如幻　われ、この世はまぼろしの、如きものなるを知りたり
了無于世意　よって、ついに、この世に、もとむるの、こころなし

世知我無堪　この世は、また、我のたえ得ざることを知り（俗惡に、たえら
れないことを）

亦無責我事　また、われを、せむること、なし

由茲兩相忘　これに、よって、ふたつながら、あい忘れ（我と世と
の二つ）

因得長自遂　よって、長く、自ら、なしとげることを得たり（自分の思う通りのことを
成しとげるの自由をもち
た得）

自遂意何如　自ら、なしとげるとの、意は、果して、いかなるものなりや

（以下略）

四、第四番目には、天下の名文とでもいうべき白詩の代表的なものを、二三、かきぬくこととした。どうしても入れたいのは、長恨歌と琵琶行である、きれぎれにいま

まで多く引用されていたが今回はその全文を入れることとした。そしてこれは飽かずに最後まで読み通せるものと信ずる。この二大名詩に続いて、名詩二十篇を紹介することとした。この二十篇のなかには、諷諭の詩もあれば、いわゆる閑適の詩もあれば、悟りの詩もある。

例えば、第五に出てくる楊子津頭月下（ようしじんとうの月下）などの転結（てんけつ、六言絶句のまいし）に「昨日は前日（一昨日）より老いたるも、去年の春は今年に似たり」などはすこぶる面白いし、また第二番目の「勝地は本来定主（もち）なし、たいてい、山は山を愛する人に属す」などもすこぶる近代的感觉に満ちて愉快である。

さらに附記として、白楽天の三峡（さんきょう）、楊子江の上流、天下の名勝）を上るの記が、興味を覚えるので、そのおもなものをかき綴ることとした。さらに白帝城（はくていじょう）を歌った竹枝の詞（ちくしのし）二首があるけれども、これは割愛した。

本書刊行にあたって、わけても、私の喜びとすることは、昨年北京訪問のさい、郭沫若先生が、重ねて私の請をいれ、直ちに本書の序文を書いて下されたことである。のみならず、さらに先生作、花の詩集を贈られたことである。茲に、御厚意を感謝する。

また京都の画伯中川伊作君が、表紙の白樂天版画をはじめ、京都大学人文科学研究室平岡武夫教授より多くの写真、白樂天像、長恨歌にゆかりある貴妃、華池、江南の風光、龍門、さらに琵琶行の図など等一さいの、なかなか得がたきものを借して貰いたること、並びにその一部を写生してくれたこと。又写真家大竹新助君が、三峡絶景の写真を選定してくれたこと、また信岡貞雄君が郭沫若先生の序文を訳してくれたこと等、厚く感謝の意を表する。

白
樂
天

目

次